

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

北園画

Handwritten title in cursive Japanese calligraphy, likely '北園画' (Kaiuen Gwa).

八九百七十八

12

13
1984
13

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
Tajima JAPAN

1984
13



序

寒^{かん}咲^{ざい}の梅^{うめ}も一陽^{いつやう}来^ら福^{ふく}と運^{うん}と^と心^{こころ}を^を室^{むろ}の^の
 福^{ふく}壽^{じゆ}草^{そう}も蒼^{そう}々^{ささ}と^とみ^みの^の山^{やま}は^はこ^ころ^ろ松^{まつ}を^をな^な。
 枯^{かれ}木^き亦^{また}舞^まを^を咲^さき^きと^と歌^{うた}が^が心^{こころ}を^を山^{やま}へ^へさ^さぞ^ぞし^し
 を^をあ^あら^らし^しめ^める^る落^{おち}葉^はと^とあ^あら^らし^しめ^める^るあ^あら^らし^しめ^める^る
 桃^{もも}太^た郎^{らう}鬼^{おに}が^があ^あら^らし^しめ^める^る金^{かね}と^とも^もの^のり^り
 あ^あら^らし^しめ^める^る金^{かね}と^とも^もの^のり^り

己正月

板元乃志需

千代春道速



新紙 落之紙 みるある金

下女

うとうあるわた人女子ひらりまうけてうま
をかよとせむしてらあより小女ひらりかへ
これにりうとせむるがあらうたうのふとま
とさか子とせむたさんせう入りりれがまかへ
うらよりヤシよのお子とやとありそはあまを

おらのお子とせむ^{下女}イ^{下女}く^{下女}あらう^{下女}のふと

蛇と種

ある表といおやぢ^{せうた}一りんせよ
みまづめとつみかうおしとおわく
うまとまうけたあかよふそくまくらじ
かるがぜんく^とし^とふれ^とあ^とま^とを
ゆづる^とあ^と子^とし^とも^とあ^とく^とう^とふ^とう^と

せーがとつくまうくわううQとさうー
ゆづろのがさくくてあうぬゆきこれり
あんでもかくくそあくにちくことあーと
あの日うあいのるさそんらまひあつがQと
そりあつめてごりあつがのあう入つめて

おぢ

こりあひよイヤニあつあんふあかあひが

人があひさうあひにまれあれがさうー
うひせりるとひさうくちぞうのるる
おまどあつううあふくらぬくあて
うづあひあひあひーとさうーあひ
たちううううのひさうあひさうさう
あひさうあひさうのひさうあひさう
あひさうあひさうのひさうあひさう
今うささうーにああうつううささう



母日りふり合は祿を由ゆ儀乃志るを
大き母ま志まりしとると記社社因因城城を
以も不不履履記記由由例例ト仕元元として由類類
かがり

医者

よく所所入入をまるる以以医医者者のい心心可可
よて凡凡と初意意あましくを今此此四四石石を
竹竹とチヤヤんん今今ては種種本本細細信信
又又と後者者あまりていいといといハ
海海と家母母由由あまりてままんん今今此此意意
竹竹とチヤヤんん今今ては種種本本細細信信

拾物

潜ひそとらふもさし一城志て暮るくる
目たぢしのにましと暮としにあらむ
むらい一城志のおとめのあらむ
「おとめのあらむ」役のあらむ
事は城をあらむは一城志のあらむ
入りてはあらむは一城志のあらむ
はらむのあらむは一城志のあらむ

新出回

盗ぬす人をあらむは一城志のあらむ
はらむのあらむは一城志のあらむ
あらむのあらむは一城志のあらむ
口へ入りてはあらむは一城志のあらむ

くしきまの 歴の 棒一本 漸て 昔

店載

きほひ裏店へ 新 店 入 り ぬ
磯小 漁人 舟 乗り せし 廿人 舟 乗り
大 魚 釣 取 あり たり たり 外 け け
多 くと ども ども ども ども ども ども

ら ぞ ぞ ぞ ぞ ぞ ぞ ぞ ぞ ぞ ぞ
と 一 大 魚 釣 取 乃 漁 人 及 舟 乗り
人 舟 乗り 舟 乗り 舟 乗り 舟 乗り
や 一 舟 乗り 舟 乗り 舟 乗り 舟 乗り
は せ ぬ 一 舟 乗り 舟 乗り 舟 乗り
よ 一 舟 乗り 舟 乗り 舟 乗り 舟 乗り

素心なるを愛するは徳なりと云ふは
いふに及ぶるを食とほむひまは

看經

法花經と法華經といふは其の
とくく法花經の言の義と云ふは

一と云ふは法花經といふは法花經

法花經といふは法花經といふは

法花經といふは法花經といふは

法花經といふは法花經といふは

法花經といふは法花經といふは

法花經といふは法花經といふは

法華

江戸をへるものぬきのぬいそさん
飛鳥の飛鳥の空守てつるをよ
「ア、飛鳥の日本にきてつる
「清き水にいでつるよとつる清き
とまねぬ族移りよまら清きを死ん
ぶとつるつるい角かを殺し

稚子

天物音原へり元角どのとせを
足てを掃子へ鼻がはくろくは次
是亦多し掃子の口へ鼻をへるを
足音 モレ鼻相を空へ小用下ては
もんせん

會合

二人あて一人がふ想いおき、
大事よきあつ、
あつ「海」の、
「不」ままぶく、
あつ「た」

残りの思を、
「漏」遠乃大事よきあつ、
あつ「た」

鶉

はんがう春を、
ふはとり時をはく、

いんばく水いんばく水いんばく水いんばく水
あいつあいつあいつあいつあいつあいつ

地籍

田舎の地籍さうさ火をたか村中を合
焼するに任ず地籍は向ひ外のなる
まじまじのうらまへ

うらまへもまじまじに相い合はるる
前と後とを云へ前がたか火をたか
ぬたをたか

下上

いんばく水いんばく水いんばく水いんばく水
あいつあいつあいつあいつあいつあいつ
あいつあいつあいつあいつあいつあいつ

と合せ得る色ハコトクノ事也
家内ノ事一ハ世ノ及世ノ事一業
を一ノ事ハ世ノ事ノ事ノ事ノ事
と云ハ家内ノ事ノ事ノ事ノ事
ハ世ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事
ハ世ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事

ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事
ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事
ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事
ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事
ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事

古事記

登久^{とく}なるやの^の世^よは^はた^たて^たて^たて^たて^たて^た
さーさん^{さん}は^は知^しら^れた^りと^とい^ふ言^言語^ご
解^とく^くせ^せる^るは^はな^なら^らず^ずに^にも^もあ^あら^らず^ず
お^おな^なの^のび^びは^は一^一たり^りと^とい^ふ言^言語^ご
自^じま^まし^しと^とい^ふ言^言語^ご

まぬぬ

医師

た^たの^のみ^みの^の医^い師^しの^の病^び家^かの^のあ^あら^らず^ず
さ^さの^の病^び家^かの^のあ^あら^らず^ず
竹^{たけ}の^のあ^あら^らず^ず
お^おの^のあ^あら^らず^ず

解^ガ矢^ニ人^ノ中^ノ中^ノ中^ノ

出^ス入^ル

むくしんみまの丸福[・]収^メ給^フ女^ノ命^ヲ
^{トク}論^ノと^キそ^ク中^ノ一^ニに^シて^モ其^ノ衰^トス^ル
衰^クリ^テの^ミあ^リは^ル中^ノ中^ノ中^ノ
下^ノを^モ世^ノの^ミ中^ノ也^ニ今^ノ命^ヲ

ま^まあ^らう^のあ^らぶ^へに^死と^いふ^中に^中
あ^らぶ^の中^に何^もも^あら^ずに^あら^ぶ
中^にあ^らぶ^の中^にあ^らぶ^の中^に
中^にあ^らぶ^の中^にあ^らぶ^の中^に

西

孫^ノの^孫と^いふ^中に^中

書て下りていふ異法は、其は蘇合香
をきかた昔のまじりて紙に書せりとい
ふは、そのまじりて書せりといふ

きりひ

吊^ひ下^り揚^りけり、佐ゆを焼香の如き高の
まじりて、そのまじりて書せりといふ

おどろかたといふは、薬のまじりて
足^{あし}由^{よし}出^いお^しり、そのまじりて書せりといふ
をきりひといふ

大原

大原は、其の角のまじりて書せりとい
は、そのまじりて書せりといふ

唯しは^レ一^ノア^ノ大^ノ所^ノ白^ノ角^ノ花^ノ
た^レよ^レ一^ノ花^ノも^レ花^ノと^レ花^ノ
花^ノは^レ花^ノの^レ花^ノの^レ花^ノ
花^ノの^レ花^ノの^レ花^ノの^レ花^ノ
花^ノの^レ花^ノの^レ花^ノの^レ花^ノ
花^ノの^レ花^ノの^レ花^ノの^レ花^ノ
花^ノの^レ花^ノの^レ花^ノの^レ花^ノ
花^ノの^レ花^ノの^レ花^ノの^レ花^ノ

御音美

おま^レい^ノ今^ノの^レま^ノの^レま^ノの^レま^ノ
ま^ノの^レま^ノの^レま^ノの^レま^ノ
ま^ノの^レま^ノの^レま^ノの^レま^ノ
ま^ノの^レま^ノの^レま^ノの^レま^ノ
ま^ノの^レま^ノの^レま^ノの^レま^ノ
ま^ノの^レま^ノの^レま^ノの^レま^ノ
ま^ノの^レま^ノの^レま^ノの^レま^ノ
ま^ノの^レま^ノの^レま^ノの^レま^ノ

女

赤門の使はらへらるる赤門のちひい入
りとはまひひひとくは何れも念ひ
おとらへ入りのしきり十
娘のりを念ひとらへらるる
つくまへとはたかきしきり
足も初らまひとのふしきり
をひけしきり
はまよしとらへらるる
づりとひひひ

掛念

大海口の船をまきしきり
まきしきり

道草といふことの難い事を知る人の心
障子に空をみつけ眼をさしたる
火燈のつらえ掛のそと一草一人
るまどごとくありてあつたまのこころ
四神のまはりの空をさしたる
るせはをいふはめをさしたる

もはも酒流をさしたるよ
と能くころひて能く然し
ひんもれあつたぬき
そんあつた

夏草

夏の日の樹物をとる探幽

おんくく ねんちる ねんちる ねんちる
はー ねんちる ねんちる ねんちる
まん ねんちる ねんちる ねんちる
ねんちる ねんちる ねんちる ねんちる
ねんちる ねんちる ねんちる ねんちる
ねんちる ねんちる ねんちる ねんちる

かきまわす ねんちる ねんちる

良唐

下女さん ねんちる ねんちる ねんちる
ねんちる ねんちる ねんちる ねんちる
ねんちる ねんちる ねんちる ねんちる
ねんちる ねんちる ねんちる ねんちる

儀約

神田の儀約
 神田の儀約は、
 一、神田の儀約は、
 二、神田の儀約は、
 三、神田の儀約は、
 四、神田の儀約は、
 五、神田の儀約は、
 六、神田の儀約は、
 七、神田の儀約は、
 八、神田の儀約は、
 九、神田の儀約は、
 十、神田の儀約は、

神田の儀約
 神田の儀約は、
 一、神田の儀約は、
 二、神田の儀約は、
 三、神田の儀約は、
 四、神田の儀約は、
 五、神田の儀約は、
 六、神田の儀約は、
 七、神田の儀約は、
 八、神田の儀約は、
 九、神田の儀約は、
 十、神田の儀約は、

あゝのほらいんくすあこいん
あゝのほらいんくすあこいんが
まぶさるるのほらいんくす
のほらいんくすあこいん
しそる「けいしん」を二二合中
けいしんかうおまへかう

まゝ


^{せん}新糸のひらよ  よのヤア

下モのせんまうら多岐糸を
来ヤア「アイ」とさうそ
首よはせうらいせん 如く大木

このめいじんはせんざんといふものぢや
とちかくといふものせんざんといふものぢや
下の所のせんざんといふものぢや
来るめんこいよゆう又字のなる時
下のせんずくひくぬことせめて
まやといふパイとまやといふことせめて

来てモシ下のせんずくひくぬ
しぬ

園

むせうにいなをあらぬめんまよ
我とワが候を喰ひ付こいんやせ
年がよらぬと氣よあつていんや

かのやまゝめが 喰ひ甘あつて
け齒くゝ女よそゝあぶたき
ひね「そのまぶ」ひやがヨ

生なま碎くだ

おやち酒よ 研ひて 帰らう コリヤ
孫まごよ ちのそゝあゝぬゝ有る

ののあゝいゝゆらぬぬゝゝゝ
むすも 碎くだゝゝゝ 研くだひの 研くだひ
ちんあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

馬の事

おやちおやちははゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
今いま有あるるののゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

くらふ午とせむの^{あま}あまら^ら ^{あま}あま
 眼^{あま}あまの^{あま}あまら^ら ^{あま}あま
 備^{あま}あまの^{あま}あまら^ら ^{あま}あま
 けむ^{あま}あまの^{あま}あまら^ら ^{あま}あま
 め^{あま}あまの^{あま}あまら^ら ^{あま}あま
 おや^{あま}あまの^{あま}あまら^ら ^{あま}あま
 ま^{あま}あまの^{あま}あまら^ら ^{あま}あま

1961

小^{あま}あまの^{あま}あまら^ら ^{あま}あま
 物^{あま}あまの^{あま}あまら^ら ^{あま}あま
 毛^{あま}あまの^{あま}あまら^ら ^{あま}あま
 志^{あま}あまの^{あま}あまら^ら ^{あま}あま

しんぶにがしとまははま

致平

致平といふ物といふるまははま
いふまははま有り物といふまの
のまははま有り物といふまの
有りみらんまやと王とおちと

の首とまははまの致平

が司そまははまの時の尻

願人

らまははまのまははま
まははまのまははま
おのまははまのまははま

あやぐぼくの腹めをこらむるある
きおのこもが答のりかー
あび大地ぐくおとまべー
原背役人の鬼ども二途のま
祈るを結ひつりつく目罪人をぬ
つりとちれがまのまなくあ日よ

いふさぞおのりかふとて

見えが跡の書

薪高真の有暫疾

